
緋色の記憶

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の記憶

【著者名】

布袋しぐれ

N3890N

【あらすじ】

突然失った幸せの日々。同胞たちは、すべて瞳を奪われ、殺された。その瞳のために、殺された。

闇市場で高値で取引される、『緋の目』のために。
許せない、絶対に取り返してみせる。

生き残った、私たちふたりにかせられた、使命。きっとこれが運命。

偶然の出会い

殺された、いなくなつた、同胞たち。必ず、仇をとると、幼馴染は言つた。必ずや、この同胞たちの目を、取り戻してみせると。

私たちは、特異な民族だつた。感情が高まるとき、瞳が鮮やかな緋色に変化する。それゆえに、苦労することは多かつた。闇市場でかなりの高値で取引されていたことは、周知の事実だつたから。私たちは、自分の身を守るための、護衛術は心得ていた。この血は、途絶えさせてはならない。とても、小さな頃、そう長おさなは言つていた。記憶に残つている。

その翌日、私たちクルタ族の同胞たちは、田をひとつ残らず、奪われた。

田の前が真っ赤になつた。生き残つたのは幸運だつた。幼馴染と、たまたま少し山を越えた向こうに、出かけていたから。食料を探すために。力が抜けたように、籠が手から滑り落ちた。

「……父さま……？」

「……幻影旅団の……し……」

「クラピカ？」

「くつそ……幻影旅団の仕業だ……」

「……なんでそう言えるの？」

「前に聞いた、長おさなからも……同胞が、襲われたと……蜘蛛の刺青の入つた、やつに」

「……それって……」

「……ああ……そのときも、田は奪われていた……居場所が、バレていたんだな」

「随分と、冷静ね」

「……いいや、冷静に見えるか？」

「分からないわ……私、もう目の前真っ赤だもの」

「私もだ」

「……クラピカ、私たち、どうすべきなのかな？」

「目を、取り戻そう」

深いため息を同時に、クラピカは小さく、それでも力強く言った。次第に感情も落ち着いてきて、目の前がクリアになる。頭に血が上つたせいか、少しほううとするが。

「どうすればいい？」

「どうすればいいのか、分からない」

「……私、闇市に紛れ込もうか？」

「ば……そんな危険なまねをするなつ」

「うーん……でも情報は入れられるかもよ？その、幻影旅団？の情報も手に入るだろうし」

「何を考えているかと思えば……くだらないことを言つな」

「でも、それ以外に、方法つてある？」

「……それは」

「いいの、私なら大丈夫。クラピカの心配には及ばないわ」

「……心配はしておらぬさ」

「まあ、随分なもの言いね」

「クルタいちの術師が」

「護衛術だけれどね」

「……連絡は必ず、取り合おう。週に一回は、かならず……」

「そうだな、ここで」

「……危険じゃない？」

「大丈夫なのだろう？」

「分かつたわ、クラピカ」

「ああ」

「……ねえ、クラピカはどうするの？」

「私が？ 私なら心配ないわ。情報を集めるよ」

「……集める？」

「ああ」

多分、これがきっかけだつただうつな。

私たちはそれぞれ分かれて、この日以来、一週間ごとに会つては、情報を交換していた。最も、ほんと収穫はなかつたのだが。しかし、その生活が数ヶ月続いた、ある日、会つことはなくなつた。来る日も、来る日も待つても、クラピカは来なかつた。何があつたのか、聞く術もなく。私たちは、共に17歳になつた。

闇市場は、反吐が出やうなほど、気持ちの悪いもの好きの連中もいる。黄色の髪色に、茶色がかつた瞳。この容姿だけでも、十二分に田立つといふのに。クラピカに最後にあつた日に、貰つたカラー「コンタクトをいれていても、やつぱり田立つものは田立つ。

「お嬢ちゃん、君、いくら?」

「・・・売り物じゃないわ」

「機嫌が悪いね、どうかしたのかい?前の客の気前が悪かつた?私はその10倍はだそうか?」

「うるさないあ・・・売り物じゃないって言つているのが聞こえないの」

「ん?」

「コンのつ・・・腐れ変態野郎!」

「うつがうつ!?」

男の顎に蹴りを入れると、一瞬、顔が緩んだ。とんだ変態だったみたいだ。とりあえず、ひと安心。

「お見事」

「誰?仲間?」

「いいや。ボクはただの通りがかり」

「何?」

「素晴らしい蹴りだつたね、何か習つていたのかい?」

「まあね」

「そうか、いつかお手合せ願いたいものだ」

「（そんな真面目なヤツに見えない・・・）いいわよ、私はマリ

ア」

「うん、マリアね。ボクはヒソカ」

「・・・ふうーん・・・」

「それにしても、君、随分と若そうだけれど？」

「失礼ね、もう一つよ」

「ここがどこか分かつてる？」

「分かっているわ。愚かじやない」

「愚かじやなかつたら、ここにいないんじやない？」

「事情つて人によるでしょう」

「・・・うん、そうだね。気に入った。お茶でもどうだい？疲れ

ただろ？」「

「・・・いいわよ」

偶然つて、本当に恐ろしいものね。

柔らかな微笑み

オレンジ色の、やさりとした髪を、風にたなびかせるのを楽しむ
かのように。かすかに、目を細めたように見えた。

重たげな一重が、ゆっくりと瞬きして、また私を捉えた。目の端
とか、そんなんじゃなくって、きちんと。

「・・・何?」

「いいや、別に」

闇市場から抜けた、少し洒落たカフェテラスに座っていた。アン
ティークな椅子と、茶器。普段の生活からは程遠い場所だ。

「さつきから・・・何?」

「つれないなあ・・・クックク・・・」

「(気味悪いなあ)」

「・・・君、あそこになんで居たの?」

「言えない。企業秘密ってやつかしら」

「・・・企業?」

「(まずい) 所属はないんだけど」

「ふうん」

「あなたこそ」

「ボク? ボク、暇だつたから・・・変わったものでもないかなあ・

・・つて」

「・・・おんな娼婦でも探してるのかと思つた

「ん~、そう見える? 残念、かも」

「・・・そこのは見えないけれど」

「まんざら、間違いでもないけれどね、ボク、変態らじーしー

「・・・毎間からジョークが過ぎるわ

「よく仕事仲間に言われるんだよ」

「気にする必要もなくて?」

「・・・そう言ったの、君が初めてだよ・・・可笑しい」

「・・・あらわつ」「

じつと食い入るように見られる」とは少ないからか、少し変な感じがする。

「元は良いの?」

「え?」

「ううん、なんでもない

「顔に何かついてる?」

「そういうのじゃないよ、気にしないで」

「・・・気になるわ」

「君、元は良いのに。飾らないのかい? それくらいの歳だろ?」

「うーん・・・気がついたら、この歳つて感じだから・・・分かんないなあ・・・」

「そつか・・・」

「何?」

「いいや」

そういうと、ヒソカは初めて、まともに目線をはずした。初対面の男に、ここまで口を開いたのは初めてだったから、少し疲れた。

「あなた、いつまでいるの?」

「ん~? まあ

「少し、寝ても良い?」

「今かい?」

「うん」

「ここじゃ、少し目立つからね・・・いいよ、寝ても。けれど、移動しても勘弁してくれるかい?」

「うーん・・・場所によるけれど・・・」

それよりも、眠たさのほうが、確実に勝っていた。
どうでもいこ。成るようになるだろ? 別に、危機感は感じないし。

私は、一気に眠りのふちに落ちた。

連絡が途絶えたのはいつだつたか。いつかの日、確か、私はあの約束の場所に行けなかつた。急な仕事が立て込んで、気付けば、日付もとつくに変わつて。それ以来、会つていない。もう何ヶ月経つただろうか。確か、おとといは、彼女の誕生日であつたはずだ。毎年、欠くことなく祝つていたのに。今年はできなかつた。毎年、何かは贈つていた。小さい頃、初めて贈つた、『白い花』。名前は知らなかつたけれど、美しかつた。小さく、可憐に強く咲くその姿に、彼女を重ね合わせていた。

「もう少し、別れる前、手段を選べばよかつたな」

呟いても遅い。連絡手段を与える機会は何度もあつたといつのに。愚かな、自分。憎い、自分が。心配はどんどん積もつていく。顔の筋肉が、硬くなりそつた。

「クラピカさん、仕事」

「あ、はい」

目の前のことでの、いつもみたいに手いっぱいだった。

目覚めた夜

カーテンの隙間から、夜の景色がのぞいていた。真っ暗な中に、かすかなネオンが光る。

赤いカーテンの部屋。はて、ここはどこだらう。身体を起しすと、悪趣味なまでに赤いベットシーツに目がこく。

「（ここは？）」

「おはよう、いや、こんばんは」

「どう、いー」

「ボクの部屋」

「あ、そう」

「今から、ボク、仕事だから」

「え？」

「寝てもいいし、自由に使って」

「・・・いや・・・でも」

「誰が、待つてる？」

「いいえ、帰る場所はないから」

そう、帰るべき場所はない。今日だって、どこかで野宿か、安い宿を取るはずだったし。

「じゃあ、ね」

「・・・お言葉に甘えるわ」

「うん、良い子」

「・・・」

「しばらく居るといいよ」

「しばらく？」

「イヤになれば出て行けばいい」

「日数の話？」

「もちろん。好きだけ、過ごせば良い。君に興味を持った」

「・・・娼婦じゃないわ」

「分かってるよ。」めん、「めん。じゃあ、ボクは一旦、仕事に行つて来るから。朝になつたら帰つてくると思つよ」「みうり

「分かつたわ」

直ぐにヒソカは出て行つたようだつた。扉の閉まる音が玄関のほうからした。

このベットはあの人と同じよつな、不思議な匂いがする。少し柑橘めいた、ミステリアスな香り。イヤじやない。それよりも酷く落ち着いた。

「どうしよう・・・やることないし」

とりあえず、ベットから出ることにした。

あまりの仕事の多さに身が持たない。酷く、最近は疲れている気がする。仕事が終わると直ぐにベットに入つて眠りにつく。シャワーを浴びるのも、最近は朝の日課になつてしまつた。面倒なのだ。夜はとにかく眠りたい。ハンターではないが、雇われの警備として名のあるグループの、ボディーガードをしている。

ふと、無作為においてあつた新聞に目が留まつた。『ハンター試験、今年も開始』

「・・・ハンター？」

前々から気にはなつていた。一体、どういうものなのか。一般人が立ち入り禁止の区域にも、ハンターなら入れるらしい。莫大な資産も手に入れることもあるとか、ないとか。とにかく、今より随分と生活がしやすくなるようなのだ。

「・・・好条件なのだが・・・一体、どういうものなのか」

考えては見たが、今はそれより、眠たさのほうが確実に勝つていた。とりあえず、眠つてしまおう。今、考えるのは無理だ。頭まで深く、布団を被り、眠りについた。

「今日、スーツ?」

「やあ」

「ヒソカ、趣味変わった?」

「いや、ちょっとね」

「いいと思うけれどね」

シズクは小首をかしげながら、そうこつた。

「今日はどうするの?」

団員からの、何気ない問いで、クロロが静かに口を開いた。

「盗みにいく。マークシンシティにあるビルにある、翡翠の涙だ」

「翡翠の涙?」

「計画を説明する。よく聞いておいてくれ」

「はい」

幻影旅団が、ひと暴れする。まるで嵐の前の静けさのようだ。街
はいつもどおり、ネオンも煌いていた。

久方ぶりの夢の中

あまりに深い眠りについていたせいなのか。久しぶりに、夢を見てしまった。

あれは多分、村のはずれにあった、池。美しく風にたなびく木々の陰。ああ、懐かしい。水のにおいも、何もかも、心地よく懐かしい。ああ、帰つてこれたのか。

村に戻つたら、先生のところに行つて剣を教えてもらわなくつちや。ジユールたちに負けてる。早く、強くなつて、一人前になりたいし。何より

「クラピカ」

「・・・なんだ、いきなり・・・驚いた」

「驚かせた?ごめん」

「抜け出してきたのか?」

「お裁縫、苦手だもん」

「そんなの練習しなくては、うまくならないに決まっているだろ

う

「ただけれど・・・イヤよ、私も剣を習つてみたい」

「私たちの習い事だ。マリアはいけない」

「何でよ」

「私たちが剣を習うのは、守るためだ。マリアたちは、私たちに守られていればいい。それが私たちの幸せだ」

「・・・そう、悪い気はしないわ」

「素直ではないな」

「うるさい」

「戻る?」

「ん? イヤよ、折角抜けてきたのに」「どうやつて?」

「”お腹痛い”つて迫真の演技で」

「・・・あきれたものだ・・・」

「それで結構」「・・・」

隣に黙つて、また腰を下ろした私を驚いた目で見た。

「戻らないの?」

「いるのだろう、まだ」

「そうだけれど」

「剣の稽古は生憎、今、休憩中だ」

「休憩中?」

「ああ、怪我した」「えつ・・・クラ」

「私ではない」「・・・そつか」

「骨を折つたらしい。先生が手当てをしていい、じきに終わるだ

ろ? が・・・まあ、いいさ」「適当ね」

「マリアには言われたくないものだな」

私が笑つたように、そういうと、マリアはふてくされたよう、元気な顔を向いた。そういう顔も、可愛いと思いついた、最近。私の心中にも、こいついう感情はあつたのか、と。妙にむず痒くつて、恥ずかしくつて。くすぐつたかつたけれど。

「失礼ね、本当に」

「・・・もう決まつたのか?」

話題を、何気なく婚礼のほうに向けた。

私たちの民族では、女性は17を迎えたら、嫁ぐのが決まりだ。嫁ぎ先も、星の導き、相性も最も良い相手のところに決まる。マリ

アの場合、少しはなれた丘に住む、アステカのところだつた。今年で25になる奴のところだ。

アステカは、少し口が重いが、剣は達人並み。先生の次に強いし、何より博学。それに、面白い人だ。私としても、それなら、というぐらいだった。

「決まったわ」

「嬉しく、なさそうだな」

「お兄ちゃんみたいに慕つてた人だもん。イヤだわ、関係が変わっちゃうの」

「大丈夫さ」

「・・・クラピカはいいよね、男の子だもん」

「・・・」

「心配ないじゃない」

酷く傷ついたように、笑う、マリア。痛々しかつた。ごめんつていえなかつた。それどころじゃない、罪悪感と、嫌悪感が押し上げてきたから。

「マリア

「

「つ・・・」

息が苦しいくらい、つまっていた。一気に、溜まつた息を吐ききると、肺が少し痛んだ気がした。

夢を見ていたらしい。あれは幼い頃の記憶。私たちがまだ、16

だつたころの記憶だらう。懐かしい夢を見たものだ。

しばらく、マリアには会つていない。元気にやつているんだろうか。何も、憂いていないことを願うばかりだ。心配事は、彼女には似合わない。彼女には、そんな顔、してほしくない。

「マリア

返事の返つてくるはずのない、名前を呟く。

すると突然に、扉が強く開かれた。

「クラピカつ・・・起きていたか、まずい、翡翠の涙が奪われた

！追うぞ」

「はいっ

会いたい

・・・たつたひとりの同胞に。

夢を見た。とても懐かしい夢。駄々をこねていたあの頃。駄々をこねることも許されていた、守られていたあの頃。

「・・・懐かしいなあ・・・」

呟く、と不思議と、涙が出てきた。懐かしい、恋しい、戻りたい、帰りたい。お母さん、お父さん、クラピカ。会っていないね、とても長い間。会いたいよ、少しだけでも。連絡する術がないの。どうすればいいんだろう。会いたいよ。どうしても、会いたいよ。恋しさが、積もっていく。まるで、風に吹かれ、積もる落ち葉のようだ。積み重なっていく、感情。

赤いシーツが、さらに濃い赤に染まっていく。

視界が赤くなるのが分かつた。ヒソカが戻つてくる前に、沈めなきや。忘れなきや。下手したら、殺されてしまうかもしない。売られてしまうかもしない。昔、この市場に出てきた頃は、よくあつた。もうそんのは、イヤだ。

鎮まれ、鎮まれ。忘れる、忘れる。大嫌いだ、この赤い目が。この目のために、殺された同胞。この目を持つたばかりに。苦しい、イヤだ。憎い、キライだ。

「戻つて・・・

苦しい。

こんなに目の赤い夜は、暗い同胞の瞳が嘆くようだ。私をただ見つめて、暗い瞳で。私を忘れてはくれないのね、同胞よ。

今、仇をつづからね。待つて。苦しめないで。分かつたから。

「戻つて・・・」

「ただいま

玄関から、そう呟いた。初めてかもしれない。マチがここに来たときすら、言わなかつたのに。不思議な子だ、あの子は。布団で眠る、マリアの傍のシーツは染まつていた。泣いたあとがある。涙の筋が、まだ、残つている。

「なにか、思い出した・・・のかな」

その頬を、さつと拭うと、静かにマリアは息をした。

優しくない朝日

日はまた昇る。希望の朝も、悲劇のあの朝も。同じ朝でも、朝が、あまり好きになれない。きっとあの日が、全てを決めてしまったんだろうね。本當なら、望むべき朝を、嫌つてしまふんだろ。寂しい、性。

「・・・」

「やあ、おはよう」

「いつから、ヤ二」

「君の日が覚める、三時間前かい」

「・・・暇じゃなかつた? 寝なかつたの?」

「うん、まあね」

「変ね」

「よく言われるよ

「・・・何?」

「なんでもない。朝()はんこでもあるかい?」

「ん()・・・ん」

「曖昧だね?」

「うん・・・あんまり食べる気がしないから・・・いいかなあ・

・・つて」

「ああ、なるほどね」

「・・・」

「ボク、もうすぐしたら、数日かかると思つ

「数日?」

「うん。もしかすると数ヶ月かもしれないけれど(家に帰る習慣
なかつたし)」

「何をしにいくの?」

「うん? 君も行くかい? ハンター試験」

「ああ、ライセンスの・・・い。いらっしゃから」

「そ。まあ、こいけれど（やつちのせつが好都合かも）」

「ん」

「自由にしててこ。」の部屋も、家も。帰つてくる保障はでき

ないけれど」

「いいよ、私、放浪癖ある」

「また君に会いたいからね」

「・・・」

「じゃあ、そろそろ準備してこくよ」

「えへもつすぐつて・・・そのもつすべへ。」

「ん」

「・・・ぱいぱい」

「ぱいぱい」

多分、言葉を失つて「ひこひことを言ひださだひ。しばりべ、その場じょひつと座つてこた。

「ええつ、辞める？君の働きは十一分に評価をしたつもりだった
んだけど・・・」

「そうではなくて」

「何がご不満なんだい？」

「ハンター試験を受けに行きたいので」

「クラピカ君？何も、全て投げ打つ必要は・・・」

「分かっています。けれど、片付けてから行きたいんです

「・・・そうか」

「お願いします、ボス」

「うん、うん、分かったよ、了解した。受理する」とさす

「ありがとうございます」

「その代わり」

「・・・はい・・・？」

朝が嫌いだ。人と別れるにしても、夜別れるより、朝別れたほうがこたえる。精神的に参る部分が、大きい。私は、ずっとそう思っていた。

背を押す人も、ものも、何もなくなってしまった今。私は、そう思っていた。

失うものなど、何もない。崖つぶちでいい。誰かがそういういた気がする。もしかすると伝記か、何かかもしれないけれど。少なくとも、その言葉が、私をここまで生かせている。

今日、やつと。今朝、やつと。嬉しく思った。朝が来たことが、朝、その始まりのありがたさが。

『その代わり』

『・・・はい・・・?』

『絶対、受かつて来い』

『はい』

『応援している。ああ、これは餞別せんべつだ。持つて行つてくれ』

『ありがとうございます』

『また、仕事をしたかったら、おいで』

『はい』

『いつてらつしゃい』

『行つてきます』

こんなに満ちた朝があること、今まで知らなかつた。希望の朝なんていふのは、タイトルだけじゃなかつたんだ。

「・・・行つてきます」

優しくない朝日（後書き）

どうしてもヒソカの会話文に、ハートとか、スピードとか入れるの面倒で……「めんなさい。」「ごめん」承を。

ヒソカからこいつもしていた。クルタの最後の日において。あの、村に帰つたときの、において。無力感に、教わる。悲しい、において。ヒソカからは、その断片的なにおいてがした。近づくたびに、脳の奥がしげれるような錯覚を覚える。それはどこか、悲しくて、懐かしい。あの幸せな記憶と、惨い記憶の断片が脳内を駆け抜ける。走馬灯みたいに。

ぎゅっと自分を抱きしめて。しつかりしなきやつて。いつまでも、あの男の帰りを待つてゐるわけにはいかない。情報を探さなくつちや。それが本命だもの。私は、そのため生きているんだから。

最初から思つていた。44番は、まずい。血のにおいてを感じていた。

「クラピカ♪ヒソカ！」

審判役の男の、力強い始まりの合図で、幕を開けた。出来れば、この男と対戦したくなかった。あまり好ましい、対決ではなかつた。望むといつたら言葉が変だが、こんな試合は、望んでいない。

「イイよ、抜いて」

「・・・そのつもりだ」

トランプの、音がやけに耳に障る。集中したい。気をとられてしまつ。私と、したことが。

「おつと・・・トランプは半分じゃゲームできない。君も同じだよ。それじゃ、つまんないから・・・しつかりしつかり持つてて」

「・・・失いはしないさ、絶対に」

「だとイイよね」

トランプが投げられた。ああ、馬鹿馬鹿しい。こんなのがう返り

てくるが、分かりきってるじゃないか。ビリービリヒだ。こんな分かりきつた軌道で、投げてくれるなんて。

それより何より、ずっと微笑を絶やさないこの男。押し殺してはいるものの、漏れ出す殺氣は抑えきれないようだ。ひしひしと、目に見えない細胞一つ一つに確実に感じていた。

「いいこと、教えてあげようか」

「何だ」

「君さあ、もう負けてるんだよね」

「なぜそういうの」

「フツフ・・・でしょ」

私が剣に目を向けたと同時に、そういった。ヒビが、入っている。さつきの分か。いや、違う。さつきの攻撃はこれが目的であつたか。迂闊だつた。

「一本でいい」

「・・・ねえ」

「何だ」

「ボク手加減してるんだけれど・・・抑えられなくなっちゃうよ」

「・・・だからどうした」

「ああ、たまらないね・・・またゾクゾクしてきちゃつた・・・ああ・・・重なっちゃう・・・君、ボクの知り合いでよく似ているよ」

頭の隅に、マリアが過る。昔、よく2人でいたら、見分けがつかないといわれたことがある。血は、そんなに近くないのに、なぜだか顔は、瓜二つなのだ。最も、今でも多分、マリアが髪を切れば、見分けはつかない程度だろう。少しマリアのほうが、小さいが。

「・・・

「君によく似ている・・・声までも」

「だからどうした」

「たまらないよ・・・彼女の戦い方を見ているだけで」

「・・・つ」

やはり、勘違いではないかもしない。ヒソカが言っているのは、紛れもなく、多分マリアのことだ。

目の前が真っ赤に変わる。

投げられたトランプが、そつくりそのまま、ヒソカの肩に刺さった。

覚悟はしていたものの、やはり尋常じゃない。ヒソカの顔は、まるで狂気に歪んでいた。

でも、それとすぐに、さっきまでの顔に戻って、両手をあげた。まるで降参でもするかのように、こちらに向つてくる。

『 で、待ってるよ・・・それから・・・マリアも君も知り合い同士、かな。同じにおいがしたよ』

「・・・え」

「ボクの負けでいいよ。次で決めることにした。いいだろ、別にマリアが、ヒソカと接觸している

・・・?

待てないわ。待てないの。私のこの身は、ただクルタの復讐のためだけに。この心臓は動いている。また街にいかなくてはならない。行かなくては、ほしい情報も何も、得られない。

『お世話になりました』

紙切れをテーブルの上に残して、扉を閉めた。
さよなら、おかしな人。

意外な接触

仕事を預かった。よりもよつて、試験の帰りに。めんどくさいとか、思いつつもちゃんとしちゃうんだから。ちょっとお人よし過ぎるつてもんかな。まあ、有料だけれど。

付き合いが長いから、仕方ないってどこもあるのかも。まあ気まぐれだし。何より、今は仕事も入ってなかつたからね。でも、ライセンスも取つたことだし、さつさと仕事したいんだけどなあ。

。

漆黒の長髪を揺らし、ひとりで闇市場へ出向いた。
ヒソカに、頼まれた。随分と久しぶりの依頼かもしない。いや、初めてかな・・・分からない。まあ、いいや。今回は殺人じゃないから、断ろうかとも思つたんだけど。随分とイロをつけてくれたから、やることにしたけれど。普段なら、伝言程度に、わざわざ動いたりしないからね。

『イルミ』

『何?』

『頼まれごとがあるんだ』

『何?』

『頼まれてくれないか?』

『内容による。殺人なら無論構わないけれど』

『ああ、殺人じゃないよ。悪いけれど。伝言してほしいことがあるんだ』

『専門外だけれど』

『できないわけじやないよね? イロ付けとくから』

『どれくらい?』

『そうだね・・・うん、一旦、300000。終わつたら7000

0支払うよ』

『うーん・・・』

『伝言だからね・・・おそらく、家にはもういないと想つんだよ』

『家?』

『ボクン家』

『(近くに)家あつたの?』

『失礼だなあ・・・まあいいや。うん、この前までは一緒に暮らしてたんだけれど。多分、出て行ったと思つから。探してほしいわけ』

『いいよ、そこまで言つながら、分かった。で、何?』

『・・・・・って伝えてほいんだ』

『分かつた』

ハンター試験会場から、真っ直ぐ向つてきたけれど。2時間もかかるとは思わなかつた。僅かな空腹感を感じ始めた。そういうや、随分食べてないか。さつさと終わらせて、何か食べよ。

あの、出て行つた日から。情報はこれっぽつちも掴めなかつた。約束の場所にも行つた。けれど、クラピカは現れなかつた。何とか、分かりきつていしたことではあつたけれど。頭の片隅、予測できことではあつたけれど。なんとなくの、虚無感。何もしたくなくなつた。どこかで情報が出てこなくてもいいかなあつて。そう考える一瞬はあつた。けれど、それ以上に、夜毎必ず夢を見て。あの同胞たちが語りかけてくる。真っ暗な空洞で。やうして、苦しくなつて。また歩き出すをやむを得なくなるのだ。

「そろそろ仕事探さないとなあ・・・」

「姉ちゃん、幾ら?」

「は?」

「いくらかつて聞いてるんだよ。一回、だめか?」

「幾ら出すつもりだ?」

「額によるのか・・・手持ちはあんまりないからなあ・・・そ

だな、800000くらいかな」

「結構。それならいい。相手にする気はない」

「・・・はつ、このア」

「じゃあ、俺が2000000出そうか」

黒髪の、妙に目の大きい人。つややかな髪は、まるで女性のよう。しかし、それを十二分に否定できるだけの筋肉が、その身体に纏わっていた。

「あなた? 何?」

「伝言を預かつてているんだ。少し時間がほしい」

「分かつた。ごめんなさい、私、こっちの人と行くわ

「・・・分かつたよ」

軽い舌打ちを含んで、さつきの男はさつと踵を返した。
きびす

「じゃあ、場所を変えよ!」

「お金は結構」

「要らないの?」

「いいわ。そういうつもりじゃなかつたし。伝言料、必要?」

「貰つてるし、追加で貰う予定だから、いいよ」

「うん、そう」

割と近くの路地の裏に入る。途中、壁のへこみを撫でると、そこは朽ちた木の扉が取つ手をなくして隠れていたようであ

氣味の悪い音を立てて、開いた。

妙に薄暗い光が入り込んでいて、ほいりつぼくつて、変な空間だった。

「ヒソカから、預かつた」

「ヒソカ・・・」

「彼、君を知つてゐるらしいけれど、合つてる?」

「合つてるわ。マリア、私よ」

「うん、よかつた。率直に言つ。ヒソカの元へ帰つて

「何で」

「探してゐる、結構、真面目だよ。何があつたか知らないし、知つ

たこつちやないけれど。戻つて、家で待つてるかも

「そういう人なのかな・・・」

「多分、次は手段も選ばず、君を探し出すと思つ」

「・・・」

「『『言いたいことがある』って。直接、会つて』

「・・・」

「一応、伝えたよ。俺も暇じやないし、疲れたから」

「・・・」

「今から帰つたら、いるかもね。2時間ちょっと前に試験終わつたから」

「・・・」

「帰つたほうが賢明だと思つよ。君が痛い目、あいたくないなら

ね

「痛い目?」

「昔かなあ・・・気に入つた子がいたと思つんだけれどね・・・

その子、割と直ぐに死んじやつたね」

「死・・・」

「本能的に狩つちやつたのかな・・・もしかしたら、熟れたのか

も

「・・・」

「良こと教えてあげるよ。ヒンカは青い果実にしか興味ないん

だ

「・・・」

「まだ死にたくなかつたなら、帰ることだね。まあ、言つたから

ね。あ、帰り道、分かる?」

「・・・うん

「じゃあ、氣をつけて」

「・・・」

「次、君の死体に出会わないことを祈るよ」

「・・・」

すつと、すぐに消え去ってしまった。
私はまるで、死の宣告を受けた、患者のよつな、気分に陥った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3890z/>

緋色の記憶

2011年12月16日19時54分発行